

郷土の会だより

発行責任者
岡村昭則

「俳句ゆめクラブ」便り 1

小林健一郎

猪俣千代子先生の授業をきっかけに作られた俳句ゆめクラブもそろそろ半年になります。最初の2回は梅田先生から俳句とは・・・、という基本を18名のクラブ員が学び、3回目からいよいよ俳句に取り組みました。郷土のクラスで受けた授業の時とは違って正式な句会にはいろいろな作法（ルール）があるのでまずそれに慣れるのが第一、今までに何回か経験しながらもまだ完全には身に付いてないかも・・・（作法通りにやるのを忘れてしまうと先生から注意“あつ、いけねえ！”となってそこで皆が爆笑、というの）もクラス仲間だけの集まりという和やかな雰囲気のできそうです。

いままでのところ、セミナールームで2回の句会と1回の吟行（及び句会）を行い会員それぞれの個性豊かな秀作・凡作を味わっています。俳句とは己が自然と出るもののように、1年間のクラスでの付き合いでは分からなかった面を知ることが多々あり、これ又楽しからずや！というところ。

6月22日には初めて屋外で作句する吟行を開催しました、場所は上尾円山公園。季節柄アジサイ、菖蒲、睡蓮などの花々が咲いており、緑豊かな公園で池を巡りながら各自頭をフル回転してその午後の句会に提出する3句の俳句作りに苦労したのも楽しい経験でした。

吟行の句もそれぞれに花菖蒲

活動は月に1回（原則・第4火曜日）ですが、セミナールームでの句会と屋外での吟行を交互に行う予定で、次回の吟行は8月に行田の古代蓮の里に行く予定です。



第10回ウォーキングサークル

杉戸宿（7月20日）

天谷 範夫

梅雨明けと同時に、猛暑となったこの日、集合場所の東武動物公園駅には、私を含め7人が集合しました。熱中症予防の為、水分補給と見学場所での休憩を充分取ること確認し、まずは古利根川沿いに南下。旧道に戻り、近津神社へ。本殿は7、8年前に放火で焼失し、まだ新しいのですが、今日調べたらこの狛犬は後ろを見ている珍しい物だそうです。残念ながら、写真撮ってませんでした。次に本陣跡へ。ここは門だけが残っていますが、説明板等は有りません。ただ、手前の交差点の信号機の下には『本陣跡』と場所名として残っています。次に向かったのは愛宕神社で本殿脇の落雷で傷んだ木が黒く焼け痛々しい。旧道に戻り前方に、立派な旧家、土蔵を見て道しるべ（元の古い物は次に行った宝性寺に有りました）の久喜方面に。遊歩道から宝性寺へは裏の墓地から入る事になってしまいました。遊歩道に戻り食堂場所を求め、結局団地の中庭へ。此処で昼食休憩。陽射しは更に一段と強くなる。一般道のコンビニで飲料の補給をして、旧道を進み全長寺到着。本堂前の日陰で休憩。少し先の永福寺へ。山門の左手に閻魔堂が有り閻魔様と目を合わせてしまいました。本堂は立派な装飾彫刻等も有り、裏の方までじっくり見たいと思いつつも暑いのでこん



古利根川の南下からスタートです

かいはバス。山門を出たすぐのところに、『西行法師見返りの松』がありますが、木の大きさを考えても、3代目？・・・ここから今日最後の一里塚へと歩く、歩く。何とか到着して休憩。此処から高野台駅までが、直線的に行けない。さっき会った小学生に聞いたり駅前の高層マンションを目印に、阿弥陀くじの様に左へ右へと歩き無事駅前に到着。

いつもはお茶（珈琲）で反省、談笑なのですが、さすがに今日はジョッキ片手に、となりました。暑かったです。お疲れさまでした。（反省）サークルを立ち上げた昨年7月に、夏は暑いので9月からの活動としたのに、今期の予定を立てるとき、そのことを忘れていました。来年は夏を避けます。 初心忘れるべからずです。



宿の本陣門



田んぼの中を歩くと立派な門構えの農家が多い



宿に残る旧家



格調高い永福寺



「西行法師見返りの松」



やっと残った日光御成街道の一里塚

高齢者の地域社会におけるライフスタイルに関する調査」(内閣府)について

岡村昭則

「孤独死は身近」4割超

全国の60歳以上の高齢者の4割強の人が孤独死を身近に感じていることが、4月2日の内閣府の発表でわかりました。単身世帯では、全体の3分の2にのぼっています。

本調査は、高齢者と地域社会・近隣との「つながり」(日常の付き合い、行事参加、緊急時の対応、生活支援など)の現状とニーズについて調査することにより、現在の地域における高齢者の実態と意識を把握し、今後の高齢社会対策の施策の推進に資することを目的としています。

1 孤独死を身近に感じる人(非常に感じる、まあまあ感じるの合計)は**42.9%**

身近に感じる	42.9%
非常に感じる	16.6%
まあまあ感じる	26.3%
あまり感じない	36.1%
全く感じない	19.7%
分からない	1.4%

・単身世帯の約3分の2、64.7%が孤独死(誰

にも看取られることなく、亡くなったあとに発見される死)を身近に感じている。大都市、中都市では、孤独死を身近に感じる人が5割近く、小都市、町村では約4割とやや少ない。

男性では64歳、女性では88歳を過ぎると、孤独死を身近に感じる人の割合は約3割と、他の年齢層に比べて低くなる。一方、80代前半の女性では85.5%の人が孤独死を身近に感じている。

健康状態が良くない人ほど「孤独死を身近に感じる」人が多く、「健康状態が良い」と回答した人で「孤独死を身近に感じる」人は36.9%に対し、「健康状態が良くない」と回答した人では52.0%であった。

2 何らかの助けやサービスを受けている人は、全体では**10.9%**

健康状態がよくない人では24.7%。手助けやサービスが必要と感じているのに受けていない人は全体では3.6%。健康状態がよくない人が受けている手助けやサービスは、「通院や送迎や外出の手助け」が17.7%、「話し相手や相談相手」が14.6%、「食事がづくりや掃除・洗濯の手伝い」が14.5%、「ちょっとした買い物やゴミ出し」が14.0%であった。

3 地域の困っている高齢者の家庭に対して、現在、何らかの手助けをしている人は約8割、手助けをしたいと考えている人は約8割。

現在、地域の困っている高齢者の家庭に対して、何らかの手助けをしている人は28.0%。手助けの内容として、「安否確認の声かけ」が5.2%、「話し相手や相談相手」が12.3%。今後、地域の困っている高齢者の家庭に対し、手助けをしたいと思う人は80.3%。手助けの内容として、「安否確認の声かけ」が45.9%、「話し相手や相談相手」が35.6%、「急に具合が悪くなったときの手助け」が26.7%であった。

一方、内閣府が同時に発表した「高齢者の日常生活に関する意識調査」では、「**将来の日常生活に不安を感じている人は72%以上**」、5年前から4ポイント増え、内閣府は現在の家計や健康への不安が、将来不安につながったと分析しています。

この調査の傾向は、平成20年7月に実施した、私が役員をしている元職場の退職者委員会(千名超)の「**会員の生活実態調査**」でも「現在、不安を感じていること」の回答の中で、「自分や家族の健康」について**全体の74%以上**の人が不安を感じていると答えているように、国の調査結果と同じであることから、高齢者を取り巻く生活環境が悪化していることを物語っています。

一人暮らしの会員の孤独死を切っ掛けに私達の退職者会は、昨年、「**声掛け運動**」の一環として85歳以上の会員百名に対して役員による「**電話訪問**」を実施し大きな反響がありました。